

書評

化石の記憶—古生物学の歴史をさかのぼる—

矢島道子 著

東京大学出版会, 2008年10月10日発行, 219pp.

ISBN978-4-13-060751-3, 3200円(税別)

国際地質科学連合 (IUGS) には国際地質学史委員会 (INHIGO) という組織があって、1996年以来毎年諸国を回って会議が開催されてきた。そして来る2011年には日本で開催の運びになっている。それと平行して学術会議のIUGS分科会に地質学史の小委員会が2007年に設置されたが、国内ではすでに地質学史懇話会 (Japanese Association for the History of Geological Sciences) が1994年以来活動中である。その機関誌『地質学史懇話会会報』は創立年には3号発行されたが、翌年より本誌『化石』と同様に年2回の発行となり、すでに31号に達している。このほど同誌の第5号以来の編集長である矢島道子氏により『化石の記憶』と題する、わが国では最初古生物学史書が世に送り出されたが、これはまさに時宜を得たものといえよう。

ここで改めて紹介の必要もなからうが、矢島氏は貝形類 (もしくは介形類、国内の化石研究者の多くはミジンコの愛称で呼んでいるが、本書ではカイミジンコと称している) の専門家である。同氏は高校・大学の教壇に立つたかわら、ユニークな地学随筆『地球からの手紙』(1992)を出した。近年は地質学史の探究に集中し、共著者たちと共に『メアリー・アニングの冒険』(2003)、『はじめての地学・天文学史』(2004)などを世に送っている。そして今回誕生したのが本書である。

構成のあらましをまず示せば、導入部の「化石とはなにか」と「化石をめぐる時間」の2章をへて、次に幕末から明治期に「日本にやってきた化石研究者」の足跡が紹介され、引き続き19世紀の「近代的化石観のなかで」、18世紀の「自然の遊び・自然の冗談」、16-17世紀の「時を超えた天才」、16世紀の「混沌と黎明」、中世と古代の「すべての始まり」と順次時代をさかのぼって、終章「化石の自然史」で結ばれている。

本書の特徴は、著者自身の履歴を織り込み、高校時代に経験した化石へのイニシエーションに始まって、大学での古生物学の修行、さらに国際会議などの度に訪れた地質学古生物学上の要となっている古典的な名所旧跡あるいは宝物庫ともいべき地質学的スポットや博物館などの実見録、そして読破した内外の書物のことなどを豊富に盛り込んだ内容にある。これは、いわば時代を遡行する著者の古生物学史紀行の概説であり、その意味で著者の告白ともいべき短い終章が興味深いものになっている。

さて初めに戻って、少し内容に踏み込んでみることにしよう。最初に化石の意味論が繰り広げられ、「氷の結晶の化石」という大先達の冗談まで紹介される。また化石は日本における造語であり中国に逆輸出された言葉であることが明かされる。元来生物無生物を問わず用いられていた化石という言葉やその原語 fossil が現代の意味に落ち着くまでの、化石観の歴史が記されている。次いで、「地質時代」の解説に入るのだが、通常「地質年代」と表現されるところも本書では一括して「地質時代」としている点がいささか気になる。「時代」がどのように認識され、区分されてきたかという歴史的過程の解説が限られた紙数では困難なことはよく理解できるが、これは古生物学史としても大課題であり、扱いにひと工夫が必要と思われる。そして正体不明の化石の発見とそれらの復元に携わった人たちが残した問題がいくつも紹介されて、最初の導入部が終わる。

「日本にやってきた化石研究者」は、わが国における古生物学の幕開けに登場したヨーロッパの研究者たちの行動録であり、また彼らと関わりを持った日本人研究者たちの交渉記である。Stopes, Naumann,

Hilgendorf, Siebold, Kaempfer らが出てくるが、著者がロンドン自然史博物館でケンペル採集の日本産ベレムナイトを突き止める話は、これらの人たちとのつながりが今なお生きていることを感じさせる。

「近代的化石観のなかで」、最初に現れるのは古典的古生物学教科書の著者 Zittel である。日本における古生物学教育発祥の拠点である東京帝国大学の、創成期の教授であった原田豊吉や横山又次郎が彼のもとで最初に古生物学を学んだという点でもこの章で筆頭となる人物であろう。さらに Darwin, Owen, Cuvier らが19世紀の代表的古生物学者として描写されている。ここで化石の描画に研究者の夫人たちが果たした役割が紹介されているが、著者ならではの貴重な指摘である。

まだ現代的化石観の確立以前であった18世紀は「自然の遊び・自然の冗談」という章題で括られている。だまされた事件で有名な Beringer, 膨大な『博物誌』をまとめた Buffon, 『自然の体系』を著した Linné, 大洪水説のもとに『神聖自然学』などを出版した Sheuchzer らについて語られる。

科学革命の時代と著者がいう16~17世紀には、「時を超えた天才」たちが出現した。Hooke, Steno, Leibniz, Kircher, Scilla, Woodward, Galilei らの業績に触れているが、なかに日本ではこれまでほとんど紹介されていない人物も混じっていて、啓発的である。「混沌と黎明」と著者が表現する16世紀には中世の長い科学の暗黒時代の夜明けを迎え、化石観が近代化してゆく。ここでは Palissy, Agricola, Gesner らについて触れられ、なかでも巨人 Leonardo da Vinci の化石論が大きく取り上げられている。

化石が文書記録に残る中世と古代の「すべての始まり」の章では、ギリシャの Aristotle を中心にする哲学者たちや Herodotus など歴史家、ローマの著述家 Pliny the elder や地理学者 Strabon の著作が引用されている。さらに中国の春秋時代の書物も挙げられ、これが江戸時代の日本の本草家に伝わったことも記されている。

終章「化石の自然史」では、古生物学史を独学した著者が地球史と学問の歴史という、二つの異なった時間軸のなかで「化石の認識の歴史」をたどる楽しさを語って幕となる。

巻末の「参考文献」では、漢字、アルファベット、さらに訳書のカタカナ書きになった著者名が入り混じって、ABC順に配列されている。しかし、この構成は読みにくく、しかもその方針を徹底するのは困難なので、分けて配列したほうがよい。歴史に興味を持つ読者であれば、ことさら文献に直接当たりたくなる場合が多いので、綿密な整理が必要である。

こうして著者の導くままに過去の世界をたどり、化石をめぐる人間ドラマに登場した先人たちの足跡が紹介されて、科学史の醍醐味に浸ることができた。おそらく近世日本の史料をさらに探れば、もっと多くの先覚者たちを再発見し、日本の古生物学史を充実させられるのではないかとも思う。著者の探究がさらにたゆまず進展するよう祈りたい。

高柳洋吉

海洋地球環境学-生物地球化学循環から読む

川幡穂高 著

東京大学出版会, 2008年11月21日発行, 269pp.

ISBN978-4-13-060752-0, 3600円(税別)

太陽系において、 H_2O からなる海洋をもつ惑星は地球のみである。しかも、地球の海洋は表層の約70%を占め、その質量は大気の約270倍、熱容量は約1100倍、炭素蓄積量は約50倍の大きさを

もつ、そのため、現在だけでなく過去においても、海洋は地球表層環境の「重心」として大きな役割を果たしている。また、陸域は削剥の場であるが、海洋は堆積の場である。そのため、連続的な環境情報は、むしろ海洋堆積物に記録されやすい。これらのことから、地球の気候・環境システムを理解するためには、海洋が最も重要な研究対象となることがわかる。本書は、まさに、このような海洋の特性を理解することで、地球環境のシステムを理解したいと考える読者のために書かれた教科書である。

本書は、「地球表層環境システムの概略」と「地球表層環境サブシステムの仕組み」の2部から構成され、10章の内容が記述されている。第1部は、「1. 地圏・大気圏・水圏・生物圏の概略」、「2. 地球環境を支配する化学原理」の2章からなる。著者は、日本でも有数の地球化学の専門家なので、この2章で化学的な背景を平易に解説してくれる。現在の海洋環境の研究では、地球化学的な手法が数多く使用されるようになり、われわれ古生物の関係者は改めて勉強し直さなければならず、苦労した方も多いと思う。本書では、この2章でこれ以降の内容に登場する化学的な基礎知識を学ぶことができ、本書以外の地球化学の論文を読むときにも手助けとなるだろう。

第2部の「地球表層環境サブシステムの仕組み」は、8章からなるが、最初の「3. 水と地球表層環境システム」、「4. 温度と地球表層環境システム」では、現在の海洋水の組成、温度、水温に関する概説と、それらを記録している指標について述べられている。有孔虫やサンゴによる水温推定、Mg/Ca比、変換関数、アルケノ水温計など、重要な指標は漏れることなく解説されている。次の「5. 陸域環境の海洋環境への影響」では、陸域から海洋への物質運搬のシステムがまとめられている。この章には、近年における二酸化炭素の吸収に関する記述が含まれており、本書でも重要な部分となっている。

次からの3章は、最も古生物学と関連の深いもので、生物にかかわる記述が多く含まれる。ここでは、表層で生産された有機物（生物）がどのように海底に運搬され、堆積物となるかが解説されている。それらは海洋の水深ごとに順をおって記述され、表層に関しては「6. 生物生産と地球表層環境システム」、中深層に関しては「7. 粒子状物質と地球表層環境システム」、海底面については「8. 堆積物と地球表層環境システム」としてまとめられている。筆者は、セジメント・トラップでも多くの研究を行っており、実際のデータに基づいた実用的な解説がなされている。

次の章の「9. 生元素の物質循環」は、生物体をつくっている各元素（炭素、窒素、リン、ケイ酸）の循環、金属元素や溶存酸素の分布に関する総説である。この章は、環境の変遷について化学元素を通して議論する場合に最も重要な部分であるといえる。生物体は、化学元素を運搬する媒体であるので、その循環システムを理解しておくことは、進化を考える際にも必要不可欠である。最後の項目は、「10. 熱水循環系の環境と地下生物圏」として化学合成を基盤とする生物圏に関して紙面がさかれている。化学合成群集は、古生物でも重要な1分野となりつつあるが、本書では熱水循環系だけでなく、冷湧水循環系も記述され、地下生命圏の話でまとめられている。

こうしてみると、本書を理解すれば、海洋環境の基礎知識を、ほぼすべて学ぶことができることを理解していただけるであろう。人によっては、本書を現世のみの海洋の教科書のように感じられるかもしれないが、過去の堆積物や化石研究に応用できる内容が数多くみられる。特に、更新世までの研究に対しては、本書で示された手法や概念がそのまま適用できる。古生物および古環境を学ぶ方々であれば、ぜひ一読していただければ、その有用性を理解していただけるはずで、本書を古環境学関係の教科書として広く利用していただくことを強く推薦したい。

西 弘嗣

学会記事

日本古生物学会（2007・2008年度） 第4回定例評議員会議事録

日時：2009年1月29日（木）13:30-18:00

場所：沖縄県立博物館講座室

出席：小笠原会長、天野、安藤、遠藤、長谷川、平野、加瀬、北里、甲能、近藤、間嶋、真鍋、松岡、西、尾田、大路、棚部、生形、植村

欠席：松本名誉会長、安達（→遠藤）、前田（→生形）、富田（→植村）、矢島（→棚部）、大野、柳沢（→近藤）

書記：庶務幹事（鈴木・中島）

報告事項

常務委員会報告（生形）

庶務（生形）

1. 今年度の文部科学大臣表彰は、評議員からの推薦案が無かったために、候補の推薦を見送る旨文部科学省に返答した。
2. 学術著作権協会より権利者委託学協会現況調査に関するアンケート依頼があり、事務局から回答した。
3. 三菱財団より、今年度の財団助成決定結果を受け取った。
4. 国際惑星地球年日本事務局よりIYPE2007-2009への協賛金の依頼があった。平成20年度は学会から1口5万円を拠出することとした。
5. (株)原書房より「全国各種団体名鑑」掲載原稿訂正依頼があり、訂正原稿を送った。
6. 国立国会図書館より納本制度60周年記念アンケートの依頼があり、回答した。
7. 静岡県牧ノ原市役所秘書広報課より、池谷仙之君の授賞歴に関する問い合わせがあり、事務局経由で回答した。学会賞受賞に対する祝電対応のために情報が必要とのこと。
8. 石油資源開発の宮入 誠氏より、講演予稿集の使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象は以下の通り。
対象1：三輪美智子・渡辺其久男、新潟県北蒲原郡沖合い坑井の椎谷層（鮮新統）の有孔虫化石群集。2007年年会予稿集p33。
対象2：秋葉文雄・小布施明子・渋谷岳史・横井 悟、北海道日高地域、振老層の珪藻化石による地質年代。日本古生物学会第157回例会予稿集p13。
9. 大学病院医療情報ネットワーク協議会よりオンライン投稿システムの案内を受け取った。
10. 地惑連合より情報局委員選出の依頼があり、常務委員会MLで候補者を募ったが、特に推薦が無かったので、選出を見送る旨連合事務局に回答した。
11. メディア・リサーチ・センターより、「雑誌新聞総かたろぐ」記載データ更新の依頼があり、事務局を通じて対応した。
12. 大学評価・学位授与機構より、機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦依頼があった。
13. 大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）より、20周年記念行事への参加案内があったが、事務局を通じて欠席と返答した。
14. バリ自然史博物館のPatrick De Wever氏より、TPPSJNSの使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象と転載先は以下の通り。

対象1：Matsuoka, A. (1991), no. 161, p. 720-738. fig. 10-1a.

対象2：Takemura, A. and Nakaseko, K. (1982), no. 128, p. 454-464. pl. 70, fig. 1a; pl. 72, fig. 1a.

転載先：O'Dogherty, L. et al., Revised atlas of Jurassic Cretaceous radiolarians at the generic level.

Geodiversitas.

15. Gale 社 より, 「Encyclopedia of Associations: International Organizations」記載データ更新の依頼があり, 対応した.
16. 松岡 篤君より, 研究集会「有殻プランクトン研究はどこに向かうのか」(11月28~29日, 沖縄県本部町)への後援依頼があり, 許諾書を送った.
17. 学術会議のIGBP/WCRP 分科会・PAGES小委員会より, 地惑連合大会ユニオンセッションとして提案する「地球環境の将来予測のための古気候・古環境情報の統合に向けて」(仮題)への本会共催の依頼があり, 許諾書を送った. その後, 「古環境科学の統合と地球環境の将来予測」というタイトルでユニオンセッションに採択された旨連絡を受けた.
18. 財団法人未来光学研究所より依頼のあったアンケート「博士課程(後期)の学生, 修了者等の進路に関する意識等についての実態調査」に回答した.
19. 地惑連合より, キャリアパス支援小委員会委員選出の依頼があった.
20. 三菱財団より, 「自然科学研究助成」, 「人文科学研究助成」, 「社会福祉事業並びに研究助成」公募の案内があった. 会員に事務局からメールで周知した.
21. 国際地学オリンピック日本委員会より, 第2回大会報告を受け取った.
22. 国際生物学オリンピック2009組織委員会より, 第20回大会開催記念カレンダーが届いた.
23. PR競争入札のための仕様書案を作成し, 落札予定価格設定のために, 学術図書印刷, レタープレス, みどり美術印刷の3社に見積もりを依頼した.
24. 学術著作権協会より, 管理委託契約約款変更の案内があった. 表現の修正のみである.
25. 奈良正和君に行事幹事の委嘱状を送った.
26. 京都大学霊長類研究所より依頼のあった拠点研究地点への移行に関する要望書について, 霊長研所長宛てに提出した.
27. 科学新聞社より, 「新公益法人法への対応及び学協会の機能強化のための学術団体調査」に関するアンケートの依頼があり, 回答した.

会計(間嶋)

1. 株式会社ジェーシービーの集金代行サービスを利用した年会費の口座振替のために, 預金講座振替依頼書・自動払込利用申込書を沖縄例会プログラムに同封した. 事務局からの会員メールでも周知した.

行事(近藤)

1. 2008年仙台年会では, 参加者309名, 普及講演会約50名, 懇親会153名であった. 収支は, 収入915,000円で支出は842,577円であり, 72,423円の黒字であった.
2. 新たな講演申込用紙(講演方法の下に「取材対応」の希望確認の項目を設ける)を作成した. HPよりダウンロードできる.
3. 沖縄例会における講演の申し込みは, 口頭63件, ポスター51件. プログラムに, 航空券と宿泊のパックの案内を同封した.
4. 沖縄例会の開催補助費として409,913円, シンポジウム非会員招待講演者の旅費宿泊費として76,240円をそれぞれ支出した.
5. 2009年千葉年会は, 日程(6月26~28日)と会場が決まった. シンポジウム案には, 「パレオバイオロジーから地球生命科学へ(世話人: 生形貴男, 大路樹生, 金沢謙一, 小竹信宏, 山口寿之君)」の申し込みがあった.
6. 次々回例会には県立琵琶湖博物館で2010年1月29~31日開催の線で調整中. 11月に平成21年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費「研究成果公开发表(B)」)を申請済み.
7. 2010年年会については, 行事委員より金沢大学に打診したが, 筑波大学からも申し込みがあった. ただし, 75周年事業との関係で, 日程と開催地の調整が必要である.
8. 講演要旨の電子メールによる送付を認める方向で検討中.

企画・広報(甲能)

1. 学会HPの質問コーナーから, カンブリア紀の研究が行える研

究室に関する問い合わせがあり, メールで回答をした.

2. 関連学術団体のニュース, ワークショップ, 公募情報を古生物学会HPに掲載した.
3. 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系自然環境学教室を, 当学会HPの「古生物を学べる大学」に掲載し, リンクを張った.
4. 年会・例会の講演へのマスコミ取材に関して, 講演申込手順に「取材対応」の掲載, 講演申込用紙への取材対応の有無欄を設けた. 沖縄例会より適用.
5. 年会・例会における口頭・ポスター発表の取材に関する対応マニュアルを作成した. マニュアルには, 発表会場での座長の対応, 取材者や発表者や会場責任者への要請などが含まれる.

国際交流(真鍋)

1. 今夏開催されたIGCにおいて国際層序委員会が開催され, 第四紀問題について議論された. 第四紀を新第三紀に続く正式な地質年代単元とすることと, 従来の鮮新統Gelasian階の下限であるGauss/Matuyama境界まで第四系と更新統を延伸することが提案された.

電子ジャーナル(真鍋)

1. PRのBioOne(兼UniBio)搭載用のXMLファイル・メタデータの作成は, 2009年よりBioOneが一括して行う. 印刷会社の作業, コスト軽減が図られることとなり, 期日通りの電子ジャーナル刊行が行い易くなる利点はあるが, BioOne側のメタデータ変換費用の拋出方法については未定である.
2. UniBioより, PR誌の2007年から約1年分として383,130円の配分があった. UniBio全体のBioOneの売り上げ50%について, BioOne各誌の頁数と利用頻度に応じて配分されている.
3. 国立情報学研究所(旧文部省)とJST(旧科学技術庁)の業務が重複するという行政指導を受けて, 今後はJSTが新規分の電子化に, 国立情報学研究所は過去分の電子化に注力する方針が示され, 11月10日に説明会が実施された. 具体的な方針が示され次第, 当会としての今後の対応を審議する必要がある.

友の会(加瀬)

1. 会員は現在100人弱である. 会費の滞納者がある. 会員に対しては, 講演会などのイベント情報を提供するなど, 従来同様のサービスを提供してゆく予定.

その他

1. 科博に収蔵されている「化石」の在庫について, 特に残部の多い62~73号, 75号の一部を整理した.

会員の入退会報告(前田; 生形代理)

1. 前回の評議員会以降, 入会13名(牧田侑子君, 辻川 寛君, 横山祐典君, 小林 要君, 山中克正君, 尾崎友野君, 大森明利君, 田原瑠衣君, 望月貴史君, 音山明久君, 今野 進君, 林 辰弥君, Kenneth Carpenter君), 退会7名(白井健裕君, 松本涼子君, 水津夏麻君, 田村 実君, 植田和昭君, 水谷伸治郎君, 帝國石油), 会員資格変更2名(澤井祐紀君(海外→国内普通), 白木正弘君(国内普通→海外))があった. 本田 裕君, 神谷敏詩君, 加藤又二郎君, 内藤源太郎君, 鎌田泰彦君の5名が逝去した. また, 前回評議員会で特別会員に推挙された会員のうち, 川辺文久君, 和仁良二君, 鶴野 光君, 熊澤慶伯君, 成瀬 元君, 藤川将之君, 石田 桂君, 一瀬めぐみ君の8名が会員資格変更を受諾した. 2009年1月28日現在会員数は1098名である.

編集状況報告

欧文誌(大路)

1. 12巻は4号まで発行済みで, 年間総ページ434ページでOriginal Article 29編, Short note 6編が掲載されている. 13巻1号は大阪年会シンポジウム特集号「古生代および中生代における温室期の地球生物相」の受理論文5編と通常の投稿論文5編程度を掲載予定である.
2. 最近の投稿数の増加やISI登録の影響を考慮して, 今後リジェ

クト率をあげることも検討する必要がある。

化石（西）

1. 85号には宇都宮例会の特集（論説4編）、通常の論説1編、解説1編、ふおっしる1編、書評2編を掲載予定である。
2. 現在2編の論説の投稿があり、1編は査読中、1編は査読者を選定したところである。
3. 86号は、仙台年会シンポジウムの特集「後期新生代の環境指標としての微古生物学と古海洋学の進展」を予定している。

特別号（加瀬）

特になし。

連合・学術会議報告

地惑連合（小笠原・生形）

1. 2008年12月1日に社団法人として登記された。今後は公益法人化を目指す。新しい地惑連合は学協会の連合体でなく、個人会員および団体会員からなる学協会そのものとなる。年会費は正会員2,000円（院生以下1,000円）、団体会員10,000円。
2. 個人会員は、宇宙惑星科学、大気海洋・環境科学、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命科学、地球惑星科学総合の六つの登録区分から一つを選び、地球惑星科学総合以外の五つの登録区分に対応するセクションを学術活動の場として、新連合に参加することになる。
3. 新連合の六つの登録区分のうち、古生物学会は「地球生命科学」との関連が深いので、本会会員に対して、この区分への登録や、本学会が提案母体となっている連合大会セッション「地球生命史」「化学合成生態系の進化をめぐる」への参加を呼びかけることが必要である。「地球生命科学」のセクションプレジデントに北里 洋君が選ばれた。

学術会議（北里）

1. 学術会議には、本会から平 朝彦君、北里 洋君が会員として、西田治文君、大路樹生君、真鍋 真君、斉藤靖二君、岡田尚武君が連携会員として参加している。古生物学会は学術会議の第二部応用生物学委員会と第三部地球惑星科学委員会の両方に関わっている。第二部の自然史古生物分科会に、本会の西田治文君、大路樹生君、真鍋 真君、斉藤靖二君、北里 洋君が加わっている。
2. 自然史古生物分科会として、今後自然史学会連合や分類学会連合と連携し、COP10に向けたワークショップやシンポジウムの開催を検討している。
3. 2009年から第四期科学技術基本計画（平成23年から）の作成が始まるが、学術会議としては、「日本の展望－学術からの提言」の内容が基本計画に反映されるよう努めてゆく。

自然史学会連合（甲能）

1. 2008年11月25日に連合講演会「自然史研究最前線－恐竜からDNAまで－」を千葉県立中央博物館で開催した。演者の一人として、本会の三枝春生君が丹波の恐竜と中生代は哺乳類について講演した。
2. 来年度の講演会は、2009年11月に石川県立自然史資料館・石川県自然史センターで開催を検討中である。

分類学会連合（佐々木・小笠原代理）

1. 2008年1月12日に国立科学博物館分館において、第7回総会と第7回公開シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類－発生から分子へ－」を開催した。
2. 「橋本大阪府知事の文化施設廃止計画に対する要望書」を大阪府知事、同府教育長、同府議会議長に、『大阪維新』プログラム（案）に対する意見・提言（パブリックコメント）を大阪府に提出した。
3. 一般公開講演会「最近の植物科学の進展：植物とは？あらためて考えてみよう」を東北大学片平さくらホールで開催した。日本植物学会、日本生物教育学会と共同で開催した。
4. 2009年1月10日に国立科学博物館分館において、第8回総会と第8回公開シンポジウム「分類学におけるDNA情報の活用」を開催した。

各種委員会報告

将来計画委員会（小笠原）

1. 地球惑星科学連合との関わり合い方について議論した。例会の連合大会への一本化の可能性についても意見を出し合った。
2. Paleontological Research誌の質の向上のため、今後の編集体制のあり方について検討した。
3. 75周年記念事業について意見交換を行った。

75周年記念事業実行委員会（小笠原）

1. 記念式典および記念シンポジウムの概要について検討した。
2. 朝倉書店刊行予定の「古生物学事典」や学会アーカイブやPR記念シンポ特集などを記念出版物として位置づける案について意見を交換した。
3. 特別顕彰や記念グッズ作成などについても検討した。

PR仕様策定委員会（生形）

1. Paleontological Research誌競争入札は1月23日（金）16:00に締め切り、学術印刷、テラパブ、栄光舎の3社が応札した。提出資料に基づき、1月27日（火）に技術審査を行った。2月9日（月）14:00事務局にて開札、2月16日（月）までに契約書を取り交わす。

その他

評議員選挙実施計画（生形）

1. 次回評議員選挙の実施は、2月中に被選挙人名簿原案の作成と投票用紙の原稿作成、3月中旬までに投票用紙原稿の作成（ABC順）と投票用紙封筒の印刷、次回常務委員会（3月21日）で投票用紙の最終確認、4月初旬までに投票用紙の印刷と発送、5月初旬に投票締め切り、5月連休明けに静岡大学で開票の予定。

審議事項

長期会費滞納者の処分について

1. 2009年1月29日現在で3年以上の会費滞納者について、会計年度末の2009年3月末日までに未納の場合には除籍処分とすることを承認した。今後も納入の督促と債権回収努力を継続することとした。

第159回例会開催地の決定

1. 第159回例会を滋賀県立琵琶湖博物館（滋賀県草津市）で2010年1月29日（金）～31日（日）に開催することとした。

2009年シンポジウム案について

1. 2009年千葉年会におけるシンポジウム案「パレオバイオロジーから地球生命科学へ」（世話人：生形貴男・大路樹生・金沢謙一・小竹信宏・山口寿之）を承認した。

ポスター賞選考委員の選出

1. 第158回例会のポスター賞の選考委員に、天野和孝君、遠藤一佳君、甲能直樹君、松岡 篤君、西 弘嗣君を選出した。

75周年記念事業計画案について

1. 2010年年会・総会時期に併せて記念式典及び記念シンポジウムを開催する概要案を承認した。会場や日程の検討、招待者の人選、予算立てなどの原案作りを実行委員会で行い、評議員会に諮る。科研費（国際学術会議開催）の申請などについても検討することとした。IPC（International Paleontological Congress）との日程調整も必要である。
2. 「古生物学事典第2版」の出版を、75周年事業の一環として位置づけることを承認した。編集長と編集幹事に委嘱状を送り、評議員会等での編集状況報告を求める。具体的な予算計画などの提出があれば、評議員会の議を経て必要に応じた予算措置を行う。出版時期については、遅くとも75周年記念式典の前に、できれば連合大会が開催される5月上旬を目指す。
3. 周年記念事業として会員名簿を発行することについては、今後も継続審議とする。

4. 顕彰については、周年事業の一環として記念式典で行うか、2010 年総会で通常の表彰を充実させる形で行うか、今後検討する。

Paleontological Research Supplement の発行と出版・編集規定ならびに PR 投稿規定の一部改訂について

- 新規出版物として、Paleontological Research に Supplement を加えることを承認した。Supplement は、主たる著者が会員である原著論文あるいは会員が編集する論文集で、年 1 回以内で刊行し、会員に配布する。出版経費には学会基金を充てるが、一部著者負担とし、別刷りは全額著者負担とする。編集は PR 編集係および特別号係が行う。
- PR Supplement の刊行にあたり、以下の出版・編集規定改訂原案を承認した。

第 1 条 1) の末尾に以下の 1 文を追加。
「なお、年 1 回以内 Supplement を出版することができる。」
- 以下の PR 投稿規定改訂原案を承認した。

A. 4. d) の末尾に以下の 1 文を追加。
「ただし、Supplement については、印刷経費の一部を著者負担とする。」

同 A. 4. f) の末尾に以下の 1 文を追加。
「ただし、Supplement については、別刷りは全て有償とする。」

社団法人地球惑星科学連合への団体会員としての入会について

- 昨年末に新たに一般社団法人として発足した日本地球惑星科学連合から団体会員への加盟登録の依頼があり、これを承認した。登録後は、連合の最高意思決定機関である社員総会の構成員となる。

日本地球惑星科学連合 2009 年大会学協会エリアの利用について

- 次回連合大会で設置される「学協会エリア」の専用個別デスクの使用を申し込むこととした。設置場所は、幕張メッセ国際会議場 2 階国際会議室前ホワイエ。

その他

- IPC 北京大会の際に行ったような若手の国際会議参加のための渡航援助について、今後継続的に実施することを検討することとした。
- 評議員選挙における会長経験者の扱いについて、将来計画委員会等で検討するよう要望があった。

受賞ポスター

2009 年度日本古生物学会第 158 例会 (1 月沖縄) 優秀ポスター賞

足立奈津子・江崎洋一・劉 建波君

コケムシ礁の出現とその後の後生動物礁の発展—下地形成作用の重要性—

徳田悠希・池野知子・江崎洋一・後藤慎介・沼田英治君

Flabellidae 科六射サンゴの分子系統解析と骨格形質の再評価

富田武照君

古代ザメは泳ぎ続けられないと呼吸できないか？鰓骨格に着目した化石サメ類の呼吸システムの復元



足立奈津子君ほかポスター

Flabellidae 科六射サンゴの分子系統解析と骨格形質の再評価

徳田悠希・池野知子・江崎洋一・後藤慎介・沼田英治 (大阪大学大学院・理)

Molecular phylogenetic analysis and reevaluation of skeletal characters in the family Flabellidae (Cnidaria, Scleractinia)

YUKI TOKUDA, TOMOKO IKENO, YASUO EGAMI, SHINJI GOTO, YOSHIO KAMATA (Osaka City University)



徳田悠希君ほかポスター

お詫びと訂正

化石84号掲載の表紙および裏表紙説明の記述に関して、編集者委員長のミスにより著者のお名前および所属が抜けておりました。著者のご氏名および所属は以下のとおりです。

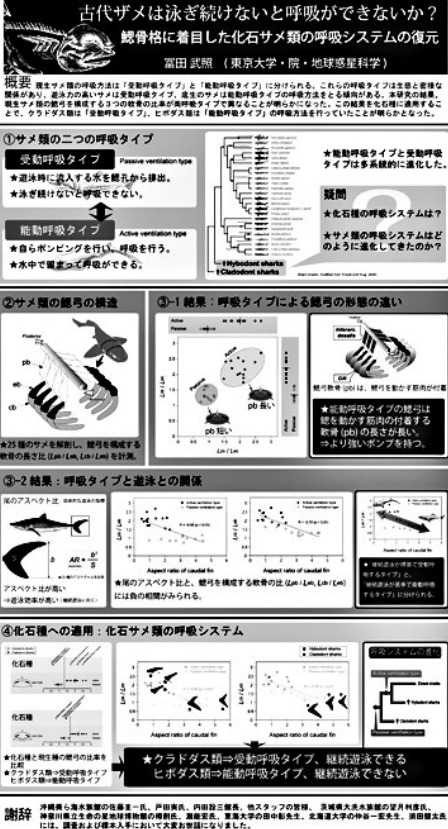
三枝春生（兵庫県立人と自然の博物館・兵庫県立大学）

お詫びして訂正致します。

編集委員会より

本号では、特集「中～高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球史」に関連する論文4編、論説1編、解説1編を掲載しました。特集は2008年2月1日に宇都宮大学で開催されたシンポジウムの内容です。シンポジウムでの7講演のうち4講演の内容について掲載させていただきました。論説は、グリソン類というイタチ科の動物に関するものです。解説では、レプリカ作成の技法に関するもので、博物館等での実践に役立つものです。あわせてご覧下さい。

(樽 創)



富田武照君ポスター



ポスター賞受賞者
左から足立奈津子君，徳田悠希君，小笠原憲四郎会長，冨田武照君